

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K04404

研究課題名（和文）性同一性障害当事者の自己実現過程と心理的变化に関する研究

研究課題名（英文）Research on the self-realization process and psychological change of person with gender identity disorder

研究代表者

吉野 真紀（YOSHINO, Maki）

日本福祉大学・教育・心理学部・教授

研究者番号：60548402

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、性同一性障害（GID）当事者の自己実現過程に焦点を当て、GID包括医療初診時および治療経過後の心理的变化を検討した。ローレルシャッハ・テストにおける共通点として、自殺の危険性（S-Con）とストレス耐性（Dスコア）を示す指標の改善がみられた。また半構造化面接を通して、受療が重要な節目となったこと、ストレスの内容の変化、身近な理解者の存在と同じ悩みを生き抜く仲間との繋がりに支えられる経験が抽出された。望む性別で自分らしく生活できるようになり心の負担が軽減した一方で、家族関係に変化を生じたり、性別適合手術（SRS）による副作用や予後の不安など、新たなストレスが生起することが考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

性別違和の悩みや今後の治療への不安、望む性別での生活で直面する新たな課題等に直面する若年層に向けて、先輩当事者の多様な自己実現モデルを提示できる。医療をはじめ教育・福祉分野等の支援者にとっては、具体的な支援イメージを持ちやすくなることに加え、治療や支援は性別変更や身体的治療が済めば終わりではないことを念頭においた当事者への支援や社会の在り方について一助となることが期待される。また、調査対象の当事者への効果として、心理検査結果のフィードバックと自己実現過程の語りを通して、自身の現状や課題が把握できる機会になるとともに心の整理や癒しに繋がると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the process of self-realization of patients with gender identity disorder (GID), examining psychological changes before and after GID comprehensive medical care. The results of Rorschach tests showed improvements in indicators of suicide risk (S-Con) and stress tolerance (D-score) as common features. The semi-structured interviews conducted after the GID comprehensive medical care revealed that receiving the care was a critical turning point. Stressors had changed, and their close confidants, who understood them, were of great help. Additionally, they found encouragement through connections with other patients struggling with similar problems. While the emotional burden had been reduced because they were able to live their own lives with their preferred gender, new stresses emerged. These included changes in relationships with family members, side effects from sex reassignment surgery (SRS), and anxiety about their prognosis.

研究分野：臨床心理学

キーワード：性同一性障害/性別違和、ローレルシャッハ・テスト、心理的变化、自己実現、心理検査、半構造化面接、性別違和の包括医療、戸籍の性別変更

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1997年、日本精神神経学会により性同一性障害(以下、GIDと略記)に関する診断と治療のガイドラインが策定されて以降、GID包括的治療を求め受診する患者が急増した。わが国におけるGID治療の歴史は、1969年のいわゆるブルーボーイ事件を境に、性別適合手術(以下、SRSと略記)が公の医療から姿を消し、性同一性の問題が医療または学問的検討の対象から外れた約30年がある。そのため、わが国におけるGID包括医療の歴史は浅く、経過や予後に関する研究は少なく、これから期待される。

心理検査を用いたGIDの心理臨床研究は、当事者の心理的特徴や適応を論じた報告がある(庄野、2001; 森ら、2005; 吉野ら、2008; 中平ら、2008; 児玉、2009など)。GID当事者が辿る心理的プロセスに関する研究は、性別移行を終えたGID当事者へのインタビューを用いた報告があり(浦尾、2013)、海外では、性転換症患者を対象にSRS前後に心理検査を用いて再評価した報告がある(Cohen et al, 1997)。しかし、GID当事者の自己実現のあり方は、SRSおよび戸籍上の性別変更が必須なわけではない。SRSや性別変更を遂げる者もあれば、ホルモン療法にて外見的に望む性別らしさを獲得したステージで維持する者もあり、また社会場面とプライベート場面とで使い分けながら自己実現を得ている者もあるだろう。若年層への支援が求められる昨今、治療的ゴールや自己実現のあり方は多様であることを示す必要がある。また調査方法について、心理検査などの客観的指標とインタビューなどの主観的体験の両面からアプローチし統合的に捉えることで、性別違和のある若年者への支援構築や多様な生き方のモデル提示に役立つと考える。

2. 研究の目的

GID包括医療を求めて受診する当事者の心理面を把握し治療に活かすため、我々は初診時に心理検査を実施し分析してきた(吉野ら、2008、中平ら、2008)。初診時の心理検査データを活かし、本研究課題ではGIDの診断を受けた当事者を対象とし、治療前(pre)と治療を経て概ね望む性別での生活を実現した時点(post)での心理面を比較することにより、当事者の自己実現のあり方および心理的变化を明らかにすることを目的とする。具体的には、客観的指標として心理検査を用いた評価、主観的体験として当事者本人からの聴きとり分析、の主客両面から調査を行う。

3. 研究の方法

(1) 対象

GID包括医療を受診しGIDの診断を受け初診時に心理検査を実施した受診者のうち、本人の望む性別にて安定した生活を送っており、主治医の判断により心理検査の再検査が有意義であると考えられる6名。内訳は、出生時に割り当てられた性別が男性(以下、AMABと略記)4名、出生時に割り当てられた性別が女性(以下、AFABと略記)2名。初診時年齢は20歳~55歳で平均年齢34.7歳(AMAB平均41.5歳、AFAB平均21.0歳)、再検査時年齢は29歳~63歳で平均年齢44.0歳(AMAB平均51.0歳、AFAB平均30.0歳)。初診時と再検査時の期間は8~12年。

(2) 手続き

対象者6名に再検査の説明と本研究の趣旨を臨床心理士より説明し、心理検査を実施した。検査バッテリーは、ロールシャッハ・テスト、MMPI、SCT、バウムテストとした(一部欠損あり)。分析はロールシャッハ・テストの結果を中心に行った。ロールシャッハテストは、包括システムによる分析方法を採用し、コーディングは臨床経験10年以上の熟練した臨床心理士2名により独立して評価し、意見が違う場合には合議により決定した。

再検査時に面接調査について文書にて同意を得た5名に対し、後日、初診時から現在までの変化を半構造化面接にて聴取した。インタビューは対象者の了承を得てICレコーダーで録音し、逐語録をテキストに書き起こし、5名に共通する重要な事項について抽出する。

また、心理検査にみられる変化と半構造化面接による本人の語りを突き合わせ、GID当事者の自己実現過程事例を報告する。

4. 研究成果

(1) 対象者について

対象者6名全員が自身の望む性別での在り方で日常生活を送っている。5名は出生時に割り当てられた性別とは別の望む性別で社会生活を送っており、1名はとくに自ら示すことなく自然体で生活している。6名がホルモン療法受療、4名がSRS済(乳房切除のみを除く)、5名が名前変更済、3名が戸籍の性別変更済である。

(2) 心理検査にみられた変化

ロールシャッハ・テスト

pre と post のデータが揃っている 4 名を分析対象とした。pre と post を比較して指標やスコアが改善した部分とそうではない部分がそれぞれにあり、人格傾向の変化については対象者それぞれの個性が高かった。その中で共通して抽出された特徴の 1 つめは、自殺の危険に関する可能性指標 (S-Con) が低くなったことである。自殺の危険性が指摘されるかまたは予備軍として留意すべき所見は 2 名にみられたが、いずれも post の自殺の危険性については陰性へと変化した。その他の 2 名についてもスコアが下がっており、自殺に繋がるような危機的な状態を回避したことがうかがえる。2 つめは、欲求刺激 (es) が減りストレス耐性 (D スコア) が頑強になったことである。過負荷状態で統制力を失いやすい状態であることが指摘された 2 名がいずれもストレス耐性に問題なく機能できる状態へと変化し、その他の 2 名についてもスコアが現状維持以上となっている。

MMPI

pre と post のデータが揃っている 4 名を分析対象とした。4 名ともに T>70 となる臨床尺度の項目数が減り、精神的な安定傾向がうかがえた。

SCT

pre と post のデータが揃っている 5 名を分析対象とした。Pre では養育環境や家族等への嫌悪や絶望、望む性別への憧れや拘り、自己否定感などが共通して見受けられたが、post では養育環境や家族関係を客観的に捉えて諦めや心残りを言語化し、性別違和についてこれまで自分が取り組んできたことを振り返り受けとめて今後に進んでいくような自己受容的な内容が散見された。より具体的で現実的な目標を掲げ、周囲との繋がりに感謝し社会に貢献したい(変えていきたい)希望と主体的に生きる様子が感じられる。一方で、プライベートな生活での孤独感や将来の不安等が率直に記されているものもあれば、ポジティブに捉えようと否認する傾向がうかがえるものもあった。

バウムテスト

pre と post のデータが揃っている 6 名を分析対象とした。6 名ともに pre に比べて post の描線が力強く、希望や目標など拡大傾向とエネルギーが感じられる。統制不良、拡散傾向、理性と感情の繋がりの悪さなど、それぞれに課題はあるが、樹冠で囲んで防衛的にまとめられていたものが幹や枝が現れてより本人らしさを表現する個性的な樹木画に変化したものが多かった。

(3) 半構造化面接から抽出された重要な事項

対象者 5 名の年齢や性別、養育環境や社会的立場はそれぞれであり、ひとり一人の語りが貴重なモデルになると考えられるが、共通してみられる重要事項については次の項目が挙げられる。まず、受診に至るにはそれぞれに決意や限界を経験しており、「受診が重要な節目になっている」ことである。死にたいと思うほどの苦悩について言及しているものが多かった。次に、「同じ悩みを生き抜く仲間との出会い」である。安心して居られる場を経験し、自分の選択を進める際に相談できる相手がいたことに大きく支えられたと語られた。また、コミュニティや職場など「身近な場所での理解者の存在(または理解者が増えていったこと)」は、性別移行を進めていくうえで実質的なサポートとなっている。逆に、理解を得られないことや誹謗中傷を受けることも同時に経験している当事者が多い。そして、望む性別で社会生活を送るためのプロセスにおいて、ホルモン療法、SRS、名前変更、戸籍の性別変更、カムアウトなどを行う当事者が多いが、その段階によって「ストレスの内容が変化していく」ことである。望む性別で自分らしく生活できるようになり心の負担が軽減した一方で、職場での困難さと折衝を余儀なくされたり、家族関係に様々な変化を生じたり、身体的治療による変化や副作用、予後の不安などが語られた。それらを経て「自分(の在り方)を肯定できるようになった」ことについて全員が語っている。

(4) 心理検査にみる客観的变化と半構造化面接にみる主観的变化について

多くの当事者がどこかの時期で、自分自身を隠して生きることへの疑問や苦悩の限界に達し、「死んだ方がましだ」「死にたい」「首をつっていたと思う」「自分で死ぬ勇気はないから事故で死ねたらと自暴自棄な運転をしていた」「終わりにしたい」と、死について想起していたことを語っている。そして post では、「生きようとしている自分が面白い」「両面あるから自分だとうまく受け入れられた」「自分の望んだとおりに生きられているから満足している」と述べられ、これはロールシャッハ・テストの自殺の危険性の高さそれが回避されたことと一致する。

治療段階を進めるプロセスで、身体や戸籍を変えても自分は自分であり変わらないことを実感し、例えば身長や骨格などが理想通りにはいかない限界があることを受け入れ諦めること、男性または女性としてどうあるべきかという囚われから解放され逆に意識しなくなったこと、自分らしさとして個性を大切に発揮したいと思えるようになったこと、などはストレス耐性の向上と繋がる考え方と言えるだろう。

一方、多くの当事者の語りを見ると自分肯定的な感情が高まったと考えられるが、ロールシャッハ・テストにおける自己中心性指標 (ego) は向上した 1 名を除いてほとんど変化がなく、自己評価は低い結果となっている。子ども時代から長きにわたり経験してきた自己知覚は人格形成に影響を与えていると推測され、変容は容易でないことを表しているのかもしれない。理解者に支えられた経験と同時に理解されずに阻害され傷つく経験をしている当事者がほとんどであることを支援者は知っておかねばならない。

(5) 多様な性についての理解を支援に向けて

1 事例に焦点を当てた事例研究として公表したもの (Yoshino, 2022) も踏まえ、性別違和の治療や支援は身体的治療や性別変更が済めば終わりではないことを念頭においた当事者への支援や社会の在り方について考えていく必要がある。性別違和のある方々の自己実現過程はそれぞれであり一つとして同じ事例はないと考えるため、今後も多様な個別事例について丁寧に分析を進めることを課題としたい。

DSM-5 (2013) では Gender Dysphoria となったが、GID の診断基準をもとに確定診断された当事者を対象としている GID と記載する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉野真紀	4. 巻 31 (2)
2. 論文標題 学校現場における性別に違和感のある子どもへの理解と支援	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 一般社団法人日本臨床心理士会雑誌	6. 最初と最後の頁 pp12-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉野真紀	4. 巻 119 (1)
2. 論文標題 児童思春期の性別違和における心理的支援 臨床心理士の立場から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 精神神経学雑誌	6. 最初と最後の頁 35-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷲見聡、吉野真紀、浜田恵、牧真吉、渡邊忍	4. 巻 50 (6)
2. 論文標題 大学生を対象とした性別違和に関するアンケート調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 623-625
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉野真紀	4. 巻 64 (1)
2. 論文標題 特集 子どもの性の問題をめぐって 性の多様性に対する学校の理解と対応	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域	6. 最初と最後の頁 46-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Maki YOSHINO
2. 発表標題 Psychological Change between Pre- and Post- Comprehensive Treatment in a Patient with Gender Dysphoria -Through Rorschach Tests and Narratives of the Patient's Subjective Experiences.
3. 学会等名 XX Congress of the International Society for the Rorschach and Projective Methods (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉野真紀
2. 発表標題 児童思春期の性別違和における心理的支援 臨床心理士の立場から
3. 学会等名 第112回日本精神神経学会学術総会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Maki YOSHINO
2. 発表標題 Rorschach study on gender dysphoria in Japan
3. 学会等名 XX Congress of the International Society for the Rorschach and Projective Methods (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 吉野真紀、鷺見聡、川端康雄、上島奈菜子、高山真衣、康純
2. 発表標題 臨床群と一般群からみる青年期の性別違和感 性別違和感尺度のカットオフ値の設定
3. 学会等名 第64回日本児童青年精神医学会総会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉野真紀、鷺見聡
2. 発表標題 青年期の性別違和感 性別違和感尺度の臨床活用に関する検討
3. 学会等名 愛知児童青年精神医学会第15回学術総会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 吉野真紀、鷺見聡、木下真也、川端康雄、上島奈菜子、高山真衣、康純
2. 発表標題 性別違和感尺度を用いた高校生の性別違和感 カットオフ値の検討とより簡便な臨床活用について
3. 学会等名 第65回日本児童青年精神医学会総会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<オンライン教材> 心理学から知るきらめく個性：性別に違和感のある子どもの理解と関わり方 心理学から知るきらめく個性：様々な子ども抱える保護者のこころの理解と関わり方

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	織田 裕行 (ODA Hiroyuki) (90340679)	関西医科大学・医学部・助教 (34417)	平成28年9月24日：削除

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	木下 利彦 (KINOSHITA Toshihiko) (20186290)	関西医科大学・医学部・教授 (34417)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	丸山 智美 (MARUYAMA Tomomi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 ジェンダー・セクシュアリティ講演会	開催年 2023年～2023年
-----------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関